

2004年～2009年の日本乳癌学会乳がん患者登録における早期乳癌に対する局所治療の変遷について

佐治 重衡（京都大学大学院）

2004年～2009年に日本乳癌学会 全国乳がん患者登録に登録された147,192例のデータを用いて、この期間における局所治療の変遷についてまとめました。2004年の患者登録数は15,675例でしたが、2009年には約2倍の34,987例になっています。これは新規乳癌患者さんの増加と、診療施設からの登録がより正確になっていったためと考えられます。

早期乳癌に対する、手術の術式の変遷を示したのが図1です。1990年代は、乳房を全部切除する乳房切除術（total, MRM, Halsted）が大多数でしたが、2003年ころに腫瘍とその周囲のみを切除する乳房部分切除術が乳房切除術の数を超え、2004年以降もその割合は約60%まで増えています。乳房切除術でも、胸筋などを含めて切除範囲の大きい modified radical mastectomy(MRM), Halsted手術といった術式は減少し、乳房のみの切除である total mastectomy(total)が一般的になりました。

診断時に腋窩リンパ節転移がないと判断された場合、ある範囲のリンパ節を全て切除するリンパ節郭清術ではなく、最初ががん細胞が到達するであろうセンチネルリンパ節の生検をおこない、転移の有無に応じて追加手術行うことが、世界的な標準治療になっています。この方法は、本邦でも徐々に実施されるようになり、2009年には約半数の患者さんが、このセンチネルリンパ節生検のみで腋窩の手術を終えられるようになりました（図2）。

これらのデータは2004年～2009年の5年間で、患者さんにより負担の少ない局所治療を提供できるようになったことを示しています。

図1 2004年～2009年の手術術式の変遷 (n=147,192)

(BCT; 乳房部分切除、total; 乳房切除術、MRM; 胸筋温存乳房切除術、Halsted; 胸筋合併乳房切除術)

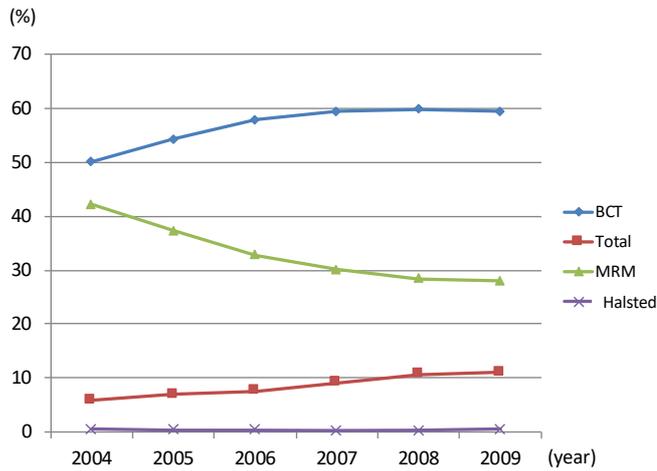


図2 センチネルリンパ節生検のみを受けた患者さんの割合

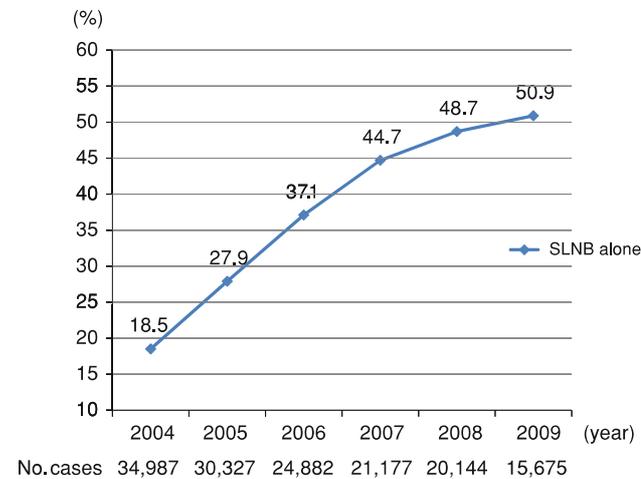


Fig. 4 Proportion of patients who had only sentinel lymph node biopsy without further axillary lymph node dissection (SLNB alone) from 2004 to 2009 (n = 147,192 in total)